しかし、この全く馬鹿気たことが大手をふって、今日の社会の大道を闊歩しているのが、現実であるのですから、勿論このような思想を生み出した真の犯人が誰れであるか、ということは、政治学や経済学的追求によりつきとめねばなりません。

それにしても、人間を物と見、その性能と経済性の価値基準でかかわるところには、人間性が全く忘れさられています。性能もよくなく、経済性に於ても低い人間は、非情にも見すてられてかえりみられません。その苦しみの声を現代は聴こうとはしません。しかし、これらの人々の苦悩の呼びは、日増に大きくなり、今や「ＧＮＰクタバレ」という声となって街に流れはじめています。

今日の親たる者、大人たる者は、この馬鹿気た、気違いじみた現実に流され、埋没同化しないで、大きく己が眼を見開き、大地にしっかと両の足を踏まえて、現実の異状をみすえたいものです。

決してマスコミの尻馬に乗せられず、資本家の甘言に耐えて立ち止まるだけの、見識を身につけたいものです。この生きざまを生活をもって語り示すことこそ、親が子に対してもつ

最大の今日的な責任ではないかと思うのです。

（46・11・5）

教育権在民

昨年七月の教科書裁判判決以後、「教育権在民」ということが、しきりに言われるようになりました。

この「教育権在民」ということは、教育の意志決定の主体が、世の大人たちひとりびとりに在るのだ、ということです。

別な言い方をすれば、国民のひとりびとりが、教育について他人まかせでいるのではなく自からの問題として、これに責任をもってかかわる、ということです。

考えてみると、「教育権在民」ということは、わたしたち国民一人一人が教育についての

責任を背負っているということであり、従って、国民ひとりびとりが、よほどしっかりしなければ、このすばらしい国民の権利も空文化し、かえって教育が混乱してしまうことになりかねません。

それにしても、わが国では、教育は学校に行って受けるものであり、学校は国家が責任をもって行うもの、という教育即学校、学校即政府国家の管理、という明治の学制発布以来の学校は「おかみ」のもの、という考えが、まだまだ一般に根強くあるようです。このような教育に対する国民の考えが、日本の教育をゆがめて来たことは否めません。

先ず、世の大人たちは学校教育万能の思想から開放されねばなりません。人間の教育は学校以外の家庭や社会に於ける、生活の場でも充分行われるのであって、教育即学校というのは、教育の一面にしかすぎないものです。

次に世の大人たちが眼ざめねばならぬことは、国家の管理統制が、すなわち公共性であるという信仰です。時としてこうした意味の公共性は画一化をもたらし、教育の場合、いわゆるそろえる教育になってしまいます。ここで忘れ去られてしまうことは、ひとりひとりとい

うことです。この結果が一クラスの生徒数を多くしても平然としていられる感覚を生み出して来るのです。

以上の通り考えて来て思うことは、真の教育の根抵になければならぬことは、ひとりびとりの人間を大切にするということです。そして、このひとりびとりの人間を大切にするという教育についての考えを、大人たち全部がもって教育をおし進めて行くこと、または、教育を支えて行くことが「教育権在民」ということにほかなりません。

「教育権在民」とは言葉だけのことではなく、世の大人たちの教育についての深い認識と責任の自覚と遂行により、はじめて生きて来る言葉であります。それ故に、この言葉は、自分の外に向って権利として呼び、ただ主張するためのものではなく、自分自身に向って教育に対する責任の自覚のしるしとして呼ばれなければならぬ言葉です。

（46・12・5）

自分を整えること

新年おめでとうございます。

昨年一年間も多くのかたがたとの交わりにあずかり、園児たちとも楽しくすごせたこと、そして共に新しい年を元気で迎えることが出来たことは、何にもましてうれしく、ありがたいことであります。

こうした深い感謝の想いを大切にして、この年も、各自の為さねばならぬ分を一生懸命に、はたせるように努力して参りたいと願っています。

それにしても、今日の政治的・社会的経済的な現実をみる時、人間として個人に於ても、集団に於ても、勇ましく対処し、解決へと努力しなければならぬことが多くあり、それらの多くの問題のどの一つをも、おろそかにして見すごしてしまうことは、今日を生きる人間として無責任であるように思います。

それにもかかわらず、そうした謂わば、自分の外に向って、あれこれと構え、気負立つ姿

勢の基本となる自分の生きる根本的な態度を整えることえの配慮こそ、最も今日を生きる人間にとって大切なことではないかと思うのです。

今日を生きるということは、明日に向って生きることであります。明日を考えず、今日だけ生きるというところには生活はありません。今日をよく整えて生存することが、明日へのよりよき生活を生み出すのです。そして、今日の自分の生存をよく整える、ということは、ほかでもなく自分の内なる生きる姿勢を整えるということなのです。

わたしたちの日常生活は、あまりにも自分の外なることがらへの気づかいに、ふりまわされているといえないでしょうか。こうした気づかいが、自分の生活を豊かにし整えさせてくれる唯一の手段であるかのように信じ込んでいます。近代の人間の文化は、この線で今日まで歩みつづけ、それなりに生活の豊かさを生み出して来ました。しかしその文化の進歩は、公害によって代表される種々さまざまなる新しい型の人間の不幸と問題とを生み、今日いろいろと論議をかもし出していることは既に私たちのよく知るところですが、ここで私たちが、しっかと見とどけておかねばならぬことは、人間の外なる不幸な出来ごとについてでなく、

人間の内なる不幸についてであります。即ち、外なる出来ごとに配慮は出来ても、内なる自己の在りように対する気づかい、配慮の欠如という不幸、または、そこから生じる不幸についてであります。

やれ政治が悪い、制度が悪い、機構が悪い、等と、みんなが政治や行政のレベルで問題を考え発言し、批判し変革することで、人間の生活を整えることが出来ると考えています。しかし現代の人間の不幸は、そのような次元でいくら論議し、変革したところで解決され、生活は整えられるものではありません。つまり、真の変革は出来ないということです。それは、先述の言葉を用うれば、明日の生活を考えずして、今日の生存についてだけ配慮することにほかなりません。しかし、大切なことは、今日の生存をよく整え配慮することによって、明日の生活を生きることです。そして、今日の生存をよく整え、配慮するということが、ほかでもなく自分の内なる在りように対する気づかい、配慮するということです。

「己れが働いて、そこで得た金で食って生きて来たのだ、誰にえんりょ気がねする必要があろう、誰に感謝する必要があろうか、己れを生かすも殺すも、己れ自身なのだ。結局金を

もち、物をもち、権力をもっている者が一番強いし、幸いというものだ」といった考えを、立て前はともかく本音として自己の一番深いところに固持していて、立て前として人間の幸福や平和について語り説き、現実を批判し、勇ましく行動したとて、人間の進歩、つまり明日の人間の幸いなる生活など期待出来るものではありません。

明日の人間の幸いなる生活をうち建てる者は子供たちです。この子供たちの心と身体とを育てる責任を負う者は、私たち大人です。その大人が今日の生存のためだけの浅はかな配慮により、自分の外なる世界にのみ、その知恵や心をうばわれることなく、深く内なる自分の在りように気づかいをなし、栄光に充ちた明日の人間の生活をうち建てねばならぬと思います。

この年を自からの内なる在りようを整え豊かにする年として共に学んで参りたいと思います。そのために、園主催の集会などに進んで参加して下さるようにお願いします。

（47・1・10）

心の健康とその条件

人間の文化や社会の機構が、どのようにうつり変ろうとも、それらは人間がつくり出すものであり、人間のためにあるものです。

ところがつくり出したものが、人間から離れ、人間の為にならなくなり、人間を圧迫するものになってしまう時、人間を幸いにするはずのそれらによって、人間は逆に不幸にされてしまいます。現代とは正に、この逆現象が生じている時代であり、現代の不幸はここにあります。

従って、今日の課題は、こうした不幸な現代にもめげずに生きて行けるような、時代に適合した人間をつくることではなく、この不幸な現代に立ち向って、それを変革して行くような人間を生み育てることでなければなりません。

しかし、今日の教育の現実をみていると、どうも現代に適合して行くことの出来るような人間をつくることに専念しているように思えてなりません。これでは、教育は時代に仕える

仕事をして、未来を幸いなものに切り開き創造してゆく、という教育本来の仕事をはたしていることになりません。ですから、今日の教育は教育不在だと言われるのです。

今日、世の大人、親たる者は、この教育不在の教育という現実を、しっかと心にとめ、吾が子の教育をすすめてゆかねばなりません。

それでは、吾が子の教育をすすめて行く段階で心得ておかねばならぬ基本は何かというと、心の健康ということです。

その人間の心が不健康であるということは、土台が腐っている家のようなものです。腐った土台の上にどのような立派なものを建てても、それはだめというもので、謂所、すべて台なしということになります。

それでは、心の健康を育てる条件は何かと言いますと、一つには、子どもの能力に相応した問題を用意し、これを自力で解決させて行くような外界の条件を整えてやることです。心が健康に成長して行くためには、子どもの前に何らかの問題が置かれることが必要です。これを親が子どもの前から取り去ってしまうならば、子どもの成長を奪ってしまうことになり

ます。心の健康に必要だと思う教育的な問題については、親は可愛そうだと思わないで、子ども自身が自力で解決してゆくことを待って見すてておく必要があります。例えば、子どもがある程度歩き得るようになれば、たとえ子どもがころんでも、子ども自身が自力で起き上るまで親は黙って見ている必要があります。この場合大切なことは、子ども自身の年令的能力をはるかに越えた事態に面した時は、親はすばやく保護する必要があることは申すまでもありません。親はこのように、子どもの発達段階を考慮して、その場面場々に接しなければなりません。従って、何でも子どもを自力でさせよ、というのではありません。又その場合、親たち、例えば父と母、母と姑の間で判断の基準が異なりますと、母は自力でと思い黙ってすててあるのに、姑や父が、可愛想にと思い手を出し助けるようなことをしては、子どもの心を不安定にさせ、かえって悪くしてしまうことになります。ですから、父と母、又姑などの間で子どもの教育方針について一致していることがとても大切です。

さて、第二の条件として言えることは、問題に直面して、その状況をうまく切り抜けられる個人の資質を高めておく、ということです。そのために必要なことは、先ず身体的健康が

必要だということと、次に全体の状況を正確に捕え判断し得る英知を養うこと、更に不安と緊張におびえることなく生活できるような、生活環境で育てるということなどです。これらについて、具体的に説明するには紙面がないのでいつかの機会にしますが、一日一日の親の教育姿勢が、その子どもの人間形成に決定的な影響を与えることを深く認識し、子どもの今でなく、将来をみつめ正しい教育を親は、その家族関係の中で賢命に、はたすべきであります。

皆様の健康と平安とを祈りつつ。

（47・2・1）

子どもが善く育つために

いよいよ今年度の保育がはじまります。私たち親や教師は、子どもが善く育ち成長して行

くことを願ってやみませんが、しかし子どもは、ひとりで善く成長してゆくのではなく、子どもをとりまく親たちの賢明なる配慮があってこそ、善く成長することが出来るのであります。

子どもをとりまく環境が、その子どもの人格形成に与える影響は、まことに大きいものです。この場合環境とは、少なくとも幼児にとっては両親、そのものです。

従って、幼児に対して両親特に母親は、賢明なる配慮をもって関わってゆくことが必要であります。

さて、第二次大戦後、わたしたちの国の教育全体に一つの傾向を与えたものに、心理学的発想にもとずく〝欲求不満〟という考えがあります。つまり、子どものいろいろな問題行動は欲求不満から来るのであって、子どもをして欲求不満におとしいれることなく、子どもの気持を尊重し、自主的に活動させてやることが大切だ、という教育態度が、どの家庭の親たちも広く迎え入れられました。

「それは欲求不満なのでしょう」と言ったお母さん同志の会話が、日常ここかしこで交わ

されるようになりました。

こうした考え自体は、決して間違ってはいないにしても、その適用の方法に於て知恵と配慮とが欠けていた結果、子どもをして自己の欲求を抑制しようとする能力を喪失させ、動物的性本能を強く育てることになってしまったようです。つまり、自由だけ知って規律を知らない人間を育てる結果になってしまったようです。この責任の一端は、誤った子ども尊重にかるがるしく走った親たちの教育態度にあります。

親は子どもにとって、常に生活の指導者であると同時に生活の訓練者でなければなりません。生活の指導とは、子どもの気持を尊重し、話し会いを通していろいろな約束をすることであります。又生活の訓練とは、必要上親が天下り的に決める規則であります。

従って、知恵なく配慮に欠けたる親は、子どもを指導すべき時に一方的にガミガミと強制し、訓練する時に黙ってすごしてしまいます。

人間の成長発達は、自己の欲求と社会の彼らに対する要求との葛藤を克服してゆくことによって行われてゆくものです。そして、小さな子どもに於ては、社会の要求の代弁者は親で

あり、教師であります。親も教師も彼らに社会の要求を伝えると共に、それと自己の欲求との矛盾克服の方途を学習させる責任と義務とがあります。結局、指導と訓練とは、正しく要求し、適切に矛盾を克服をさせるように導き見守ってやるということです。にもかかわらず、子どもを放任し、甘やかし、自由の意味を親自身誤ってしまうと、克服し耐えねばならない、さまざまな苦難や障害の前で逃げてしまい自尊心だけは他の人より強い、といった情緒的に安定を欠いた人間にしてしまいます。

子どもが善く育つのも悪く育つのも、親がどのように子どもを指導し訓練するか、その知恵と配慮の仕方如何によって決まります。そのために親自身、自分自身の生き方の価値基準をしっかともって、世間の風設にまどわされることなく大地に立って歩んでいることが大切であります。

（47・4・1）

〝ほんまもん〟を生む教育

皆様今日は！　新学期がはじまってもうすぐ一ヶ月になります。

お母さんから離れがたく泣いていた子どもも、今はほとんど泣くこともなく園集団に適応しつつあり、その様子を見ていて、子どもが成長して行くためには、忍耐ある配慮の積み重ねが、その子どもをとりまく大人たちに必要なのだ、ということを今更のごとく思います。

何ごとも子どもが修得し適応し参加して行くようになるためには、積み重ねによる長い時間が必要です。教育とはそういうものだと思うのです。

ところが、親は時として、すぐによい結果を期待してしまいます。

幼稚園に行くようになったのに、少しもよい子にならない」

と思いがちです。

今日の科学技術の進歩によるインスタント性が、人間の心の成長とか教育についての考え方にまで影響を及ぼし、その結果、すぐに結果のみを期待する愚かしい心をいだかせてしま

うのかもしれません。

私は、大きいことも、早いことも決していいことではないと思っています。特に人間の心や知恵の成長ということは、長い時間のめだたない積み重ねこそが大切であり、そこからこそ〝ほんまもん〟が生れ出るのであると確信しています。

ところで、先述の「少しもよい子にならない」という場合に、親たちが期待する「よい子」とは、大人や大方の母親のもつ規範に適合した言動をする子どものことを指していう場合があります。例えば、おとなしくて、お行儀がよく、本などを熱心に読んで、可愛いことをいう子ども。しかし、もしこんな子どもがいたら、これこそ問題をいっぱいもっている子どもであるということが出来ます。

手や足、それに顔まで泥んこになって砂場で遊び、ドロいじりをし、けんかもすれば、大人においかけられる程の悪ずらをし、らんぼうな言葉をつかって、えらそうにはしゃぎまわる子ども、これこそ健康な子どもであり、子どもらしい子どもであります。

子どもは、叱られたり、ほめられたりしつつ、そのなかで協同したり、競走したりするこ

とを学び、その社会での慣習的行動や自分に期待されている社会的役割を覚えて、ついには好意的態度をもち積極的に参加してゆく子どもになるのです。〃ほんまもん〃を生み出すにはインスタント教育ではだめであります。

今月は右のようなことを考え、自から親として吾が子にかかわっている自からの姿勢をかえりみたいと思います。

（47・5・1）

叱り方雑感

厳粛なクリスマス礼拝も、楽しいおもちつきも感謝と喜こびのうちに過ぎ、二学期もこれで無事終り、明日から冬休みに入ります。

休みになると子どもたちは、家庭に母親と共にいる時間が多く、ついいつもより子どもを

叱ることが多くなりがちです。

そこで、この機会に子どもの叱り方といったことについて、少し考えてみたいと思います。

さて、〃叱る〃ということは、別な表現をすれば〃罰〃であり、従って、〃ほめる〃ということは〃賞〃であると申せます。

子どものある行為に親が罰を与えると、その行為は禁止され、その後、子どもが同じような事態におかれたとき、その行為が出現しにくくなります。その反対に、子どものある行為に賞が与えられると、その行為は強化され、その後、その子どもが同じような事態におかれたとき、その行為が再び出現しやすくなります。従って、賞や罰を与える目的は、統一のとれた行動の体系を学習させることになります。以上は、叱ること、ほめることの効果の原則的なことであり、親たるもの先ずこれを頭の中にいれておいていただきたいと思います。

そこで、次に親がしっかり弁(わきま)えておかねばならぬことは、子どもの行為に対する〃賞〃と〃罰〃の基準です。叱る場合親自身が明確な基準をもたず、その時々の気分によって同じ行為に対して、ある時は〃ほめ〃、ある時は〃叱る〃のでは、子どもは混乱し先述の学習は成

立せず、神経症的な行動をする子どもにはなりかねません。

ですから、親はその時の気分で子どもに接するのでなく、自分の善悪の基準を明確にもっておくべきです。それはとりもなおさず、親が自分の人生観を確立しているということです。更にそれは、親が吾が子にどのような人間になってほしいかと願う、子どもに対する姿勢の問題でもあります。この点で親自身ふらふらしていると、叱り方までふらふらすることになります。

さて、特に幼児を叱る場合に心得ておくことは、第一に親が悪いと思う行為を子どもが行ったらその場で直ぐに叱る、ということです。周囲の他人を気にしないでビシーとその場で叱らないと、後からでは何故叱られているのか幼児は理解できません。只こわい顔して親が叱っているのが恐ろしくて、恐ろしさに対して〃ごめんなさい〃と言うのであって、叱られていることがらに対して〃ごめんなさい〃と言っているのではありません。親は叱る場合常に、何について叱っているのか、ということを子どもに充分理解させて叱るべきで、そうしないで只叱るだけでは、恐怖心を子どもにうえつけるだけであります。

第二に心得えておくべきことは、他人をもちだして叱らない、ということです。

「先生にいいつけるよ」「ひとが笑うよ」……。親は自分自身の判断と責任で叱るべきで、先生や世間のひとびとの判断や基準で叱ることは、親の権威を子どもに疑わせる第一歩です。

第三に心得えておくべきことは、どの行為が叱られているのかを、はっきりわからせることです。これは第一の心得に通じます。

第四に心得えておくべきことは、決して兄弟や友だちと比べて叱らないことです。例えば兄を弟と比べて叱る時、兄自身を侮辱することになり、弟は兄を馬鹿にするようになります。それは兄弟の仲たがいを生み、親自身を結果的には憎み怨むことになるのです。こんな叱り方は百害あって一利なし、最低の叱り方であります。

第五に心得えておくべきことは、できないことを叱らない、ことです。例えば、おねしょしたといって叱ったとて、すぐには治りません。かえって逆効果です。できるように叱るにはどうすればよいか、ということをよく考え叱るべきです。叱れば出来るというものではありません。

第六に心得えておくべきことは、短く簡潔に叱ることです。くどくどといつまでも叱っていると、叱られているポイントが不明瞭になり、ひねくれや反抗心を子どもに生じさせます

以上限られた紙面で、かんたんに記しましたが、いづれ白百合ホームの定例集会で、くわしく学びたいと思いますので、この号の通信は保存しておいて下さい。

（46・12・21）

考える子ども　考えない子ども

むしあつい毎日です。でも子どもたちは、今日も元気に登園し園庭でたのしそうにはしゃいでいます。

今月は、考える子ども、考えない子どもについて少し考えてみようと思います。

毎日、集団の中での子ども達と接していて気ずくことは、自分の考えや行動をもたず、他

人の考えや行動に依存的であったり、模倣ばかりしている子ども、自分の能力に自信をもち何ごとにも積極的・意欲的にかかわって行こうとする子ども、更に今一つは、依存的模倣的でもないし、積極的意欲的でもなく、ただ傍観している子どもなどがいるということです。

勿論、この場合類型的に評価した場合、何ごとにも積極的意欲的に自覚をもってかかわってゆこうとする子どもが、より好ましい子どものすがたである。と言えます。そして与えられた現状そのままであまんじ、積極的・意欲的に何かをしようとしなかったり、一方、人のまねばかりして自分自身で工夫しようとしない、これらの態度からは当然のことながら「考える」ということは生まれてはきません。

人間の人間らしさの一つは「考える」ということです。「考える」ところから、「新しいよりよいものをつくる」ということが生まれるのです。ですから、いくら記憶力がすぐれていても、又力が強くあっても、考える力がなければ、人間は進歩することは出来ません。

人間の考える力は幼児の時より培かわれなければなりません。知恵のある人とは生活の中で、ことに応じてよく判断し思考し、よりよく対応し、よいものを創造して行く人のことで

す。その知恵のもとは、〃考える〃ということです。

では、よく考える人となるために保育のうえで留意しなければならぬ点について少し考えてみたいと思います。

ひとつには、その子どもの好奇心を刺激することだといわれます。普通の子どもなれば誰しも好奇心をもっています。ものごとについて外がわから〃さあ、考えてみよ〃と、おしつけるのではなく、その子どもの内がわに、〃おや〃〃なぜだろう〃〃どうなっているの？〃といった好奇心を起こさせることです。これこそ知的活動のための準びになる感情の状態であります。

こうした好奇心を刺激し、発生させる材料は幼児の場合、生活のあらゆる場所にあり、いろいろな機会に相遇(そうぐう)しているのですが、周囲の大人たちは、それを無視し、幼児の驚きや好奇心をふみにじってしまう言動をし、せっかくの機会をあえて、すててしまう場合が多いです。

さて、ふたつめに留意しなくてはならぬことは、子どもの直観を生かす工夫をさせてやる

ことです。最近は発見学習とか、探求的学習とかいう、子どもたちの直観力を重視する傾向が強くなっています。これを幼児の場合にあてはめて考えてみますと、その場その場の置かれた状況で、その子どもがどのように直ぐに、自分の力で出来るだけ解決できるかということです。すぐ逃げようとする者、最後迄やりぬこうとする者、ちょっと立ち止まって考える者、行きずまった時うまく気分を転換できる者、すぐ他人に依存してしまう者、泣き出す者、全く教師や大人達が思いつかないような観点から解決しようとする者……。

以上二つの留意点を指適しましたが、子どもを〃考える人〃に育てたいと思うなら、周囲の大人たちが必要以上に保護しないことです。道を歩く子どもの先にすでに大人がいて、子どもがつまずかぬように、心地よく歩けるようにと、石を取りのぞき、道を清掃して歩くといったことなど不必要なのです。子どもを一人歩かせるのです。そこで石につまずきころんだならば、必ず石をとりのぞき、石に気をつけて歩くようにと考えます。又どうすれば心地よく道を歩くことが出来るか、ということも考えるでしょう。

今日の親は〃愛〃という名で〃教育〃という名に於(おい)て、子どもを考えない人間に育てつつ

あります。しかし、これは、最も人間らしい知恵の中心である〃考える力〃を育てない、という意味で将来の人間を不幸にすることにもなりかねません。

親は子どもを幼児の時に過保護に育て、子どもから、〃自分で考えて歩む力〃や育つことを阻んでおきながら、小学生も高学年・中学生…等になって、子どものさえない姿をみて嘆くならば、被害者は子どもであり、犠性者は子どもであって、親は自からが加害者であったことこそ嘆き、子どもに謝らねばなりません。

右のような悲しいことにならぬよう、親たる者よく考えて吾が子を育てて参りたいと思います。

（47・7・1）

先ず親がしてこそ

長かった夏休みも終り、いよいよ二学期が始まりました。この学期もみんなが身心ともに健康にすごせますようお祈り申上げます。

さて、二学期の保育の主題は、お渡ししましたカリキュラムの通り、四才児は「美しいものを発見する生活」であり、五才児では「感謝のある生活」です。

そして、五才児の場合の目標は、第一に「喜こびを進んで分ける生活が出来るようになる」、第二に「たくさんの人に助けられて自分の生活のあることを知り、感謝して力一杯励む」、第三に「クリスマスを感謝する」というふうになっております。

この場合、主題や目標を保育のうえで成果あるものとならしむるためには、園児をとりまく教師や各家庭の大人たちの生活態度に一切がかかっています。

園児をとりまく大人たちが、その生活のなかで「ありがとうございます」という気持を態度や言葉を通して、自から表明せずして、子どもに「ありがとう」という「心」を教えることは出来ません。

例えば、「お早ようございます」という挨拶を子どもが身につけるためには、先ず親が朝

起きて子どもと顔を合せた時、「○○ちゃん、おはよう」と挨拶の声をかけてやることが必要です。そのような日常生活の中で親が何もしないでいて、「今日はと言え」「お早ようと言え」と、いくら命令しても、子どもには言えたものではありません。ですから、園では、先生から先ず、子どもに挨拶の声をなげかけてやることによって子どもに挨拶することを身につけさせるように指導するのです。

何ごとも「してもらってあたりまえだ」、というようような気持でいたり、ことあるごとに他人を批判し、責任を他人のせい、にしてしまうような生活態度、これが現代の　人たちの中に多くみられます。しかし、これは人間の本当の在り方をしらない「小人」の在り方で「大人」ではありません。

「大人」は、自分が決して、ひとりで生きているのではない、他人があって自分があることを知っている者です。そして、人間は相互の関わりあいのうちに生き、そのかかわりあいは相互の愛と感謝とをもつてなさねばならぬことを弁えている者こそ、「大人」なのです。

「ありがとう」という一言が、どれだけ相手を心安らかにし、憤起させ、更に「ありがと

う」という心を相手の中に生ましめることでしょうか。

特に、子どもにとって、愛し信頼している親から「○○ちゃん、ありがとう」と言ってもらう一言は、千金の価をもっています。それを聞いた子どもは、「もっと手伝ってあげよう」、「もっと親切にしてあげよう」、「もっとがんばろう」という気持を喜こびのうちに生ぜしめ、「ありがとう」という言葉や思いの内容を身をもって体得するのです。

「しかるより、ほめよ」、「批判し、もんくを言うより、感謝の言葉をなげかけよ」、このことを決して忘れてはなりません。

心のこもった感謝の気持や態度、愛のある言葉を相互に交わし合うことは、人々の心を豊かにし、平安で満たし、勇気を与え、美しさを作りあげ、すべての人関係をよくする潤滑油となります。

この学期の主題や目標を園児のみでなく、お父さまも、お母さまも目標にしていただきたいものです。それでは、今月もお元気でおすごし下さい。

（47・9・1）

友だち―六才児の場合―

六才前後になると、「友だち」又は「○○ちゃん、××くん」といった友だちについての名前や言葉が話題としてよく出て来るようになります。

ところが、この年令では、友だちと仲よく遊ぶことができるようにみえても、長続きがしないものです。それは、ほんとうの社会生活というものが、未だよく身についていないからです。その一例として、物の奪い合いから、すぐけんかをしてしまいます。でも、大人が気にしているほど深刻でなく、すぐに仲直りします。

ですから、けんかをしても、子どもどうしにその解決を任せたほうがよいと思います。しかし、暴力をふるっているときなどは、大人が仲にはいって両方を引き離したほうがよいでしょう。

友だちとの年令差は、その子どもの知能や運動機能の発育の状態を考慮に入れる必要がありますが、普通には一才ぐらいまでのひらきが望ましいようです。このことは四才児の場合

でも同じです。

この年令になると外で友だちと活発に動き回ります。遠出もするようになり、従ってよいことわるいことを覚えて帰って来ますが、それらは成長の過程ですから心配はいりません。それは、只ほっておいたらよいというのではありません。善悪のけじめは明確に親として、子どもにハッキリ示しておくことは必要です。又親が心配するような、表にあらわれる言葉使いの悪さや、気になる振舞をしなければ、そう長続きはしないで自然に忘れてしまうものです。

とにかく、友だちと遊びながら、人とのつき合い、譲り合い、協調性、社会性、運動機能、知的な面など、しかられたり、ほめられたりしつつ体得し、伸びて行くのです。いつもよい子でばかりいて、手も足も出ない子は、好ましい大人になれません。

六才になると、規則を理解してよくそれに従うことができ、がまんもできるようになります。少し大きな子どもが加わってリードすれば、それに従うこともできます。

ところで、この時期は前ギャング時代と言われる年令になり、友だちとまとまって、いた

ずらもして歩きます。たとえば、よその家の呼び鈴をならしたり、よその庭にもぐり込んで花を取ってみたり、小さなギャング的行動をして親を困らせます。しかし、本人は、それほど悪いことをしたとは思っておりません。でもそんな時こそ教育効果が上る時で、小さいのだからとほっておかず、その場で注意し、特に迷惑をこうむった本人から叱られるのが効果的です。ですから、自分の子どもでなくても、悪いことをしていたら、その場で叱ることです。「あの子の親は何をしているのか！」と文句を親になげかけるのはよくありません。ましてや親同志が相互に子どものことで争うようなことは最低です。親は自分の子どもが悪いことをして、他の人から叱られたなら言こんでおくべきです。この時期の子どもは、独立して行こうとして親から離れ、行動しだす時でもあり、子ども自身が自分で判断できるようにするためのよい時期であります。

「その場で注意」、これは三才児・四才児・五才児をとわず言えることですから、親は知っておきましょう。

先に持ちました〃ともだち〃についての園に於ける語り合い会の折の話など思い出し、そ

れと合せて今一度考えてみたいと思います。

（47・11・5）

人間の醜悪さについて

「神は、そのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった」（聖書）

12月はクリスマスの月です。毎年クリスマスは商業主義の波にのって、人々のもとに運ばれて来て、二十五日が過ぎると忽ち消え去って、その後かたも残しません。勿論クリスチャンでない一般人には、クリスマスはお祭り気分で楽しくすごせたら、それでよいのかもしれません。

しかし、それだけでクリスマスを見送ってしまうのは少し惜しいように思うのです。むつかしい宗教的理屈はともかく、〃一生懸命、自分のあらんかぎりをつくし、隣人愛に生きぬ

いた一人の人間がいた〃ということは、ただそれだけで、自己の利益のみ追求して止まぬ現代の人間への教訓となりはしないでしょうか。

先日も幼児教育に永らく関係していられるひとが来訪され、いろいろ話をしているうちに、つぎのようなことを聞かされました。

「○○幼稚園の園長が、○○賞を受けたのですがね、いいかげんなものですわ！彼が過去に幼稚園でどんなことをして来たか、それを知っているわれわれからすれば、あほらしゅうて、あいた口ふさがりませんわ！」

「でも、なぜそのような人に○○賞が与えられたのです」

「それですが先生！だいたい園協会あたりで推せんするわけです。ところが、その推せんを受けるために、物や金がうごくのですわ。きたないものです。それで教育者なんですからね、そんなことを知らないその園の母の会は、さっそく○○ホテルで祝賀会を開いて喜こんだということです。それも園の宣伝のために使うんですな。全く困ったことです。そんな園長が多いですよ！」

わたしは、ことがらの真相は知りませんが、こんなことは、どこにでもあるあたりまえのことなのかも知れません。教師も裁判官も宗教家も、ましてや政治家に至っては言うに及ばず、いいかげんといえばいいかげんなものです。

問題は、自分の名誉や利益の追求に欲々としつつも、表面や外面的には誠実顔してとりすましている人間の醜悪さ、その醜悪さのうちで平然としていられる心情、「おれだけではない、みんな同じなのだ」と居直る心で自分の生きざまを正当化し、合理化する生活態度、これが問題です。ここには、人間としての自分を自から放棄した非人間性をみるだけです。それは、他人ごとでなく、「お前のことなのだ」とクリスマスは告発しているように思うのです。

醜悪で偽善に満ちた人間の生きざまが今や日常化し、その日常性の中に自からも埋没して、醜悪さに気づかなくなってしまった現代に、なおクリスマスがあるということは、一種の「喝」であり、「喝」として受けとめたいと願うのです。

師走のあわただしい日々ですが、この一年をふりかえるうちで、こんなことも考えてみた

いと思っています。

（47・12・2）

幼児と絵本 1

―― その果す効果について ――

この限られた紙面で、幼児と絵本についての一部分も語ることは出来ませんが、さしあたり、絵本のはたす効果的な面について考えてみたいと思います。

この場合、辰己義幸氏（中央図書館本とこども会員）に従って三つの面に分けますと、まず第一は、「物語を抽象的にとらえる力を養う一つのステップになる」ということです。例えば、子どもたちは、イヌの絵を見て自分の知っているイヌを思いうかべます。かって自分が見聞きして知っているイヌの姿が、絵本のイヌの絵にかさなって、絵本の中に自分の経験

を再認させることができる。そしてイヌのなき声、やわらかな毛の感触、走ったり尾を振ったりするイヌの動作や様子を、心の中で再現することが出来るのです。これは人間以外の動物には出来ないことです。人間はこれを二才にならぬ前に出来るようになるのです。つまり反応を示すようになるのです。

これは、絵を見て実物を見たと同じ反応を示すわけで、この反応が抽象的に物ごとをとらえる力の芽生えを意味しています。絵本を多く見ているうちに子どもは、この力をのばし、あわせて自分の知識や体験を整理することを学ぶのです。つまり、イヌの絵を見て、それが自分の知っているイヌと色や種類や大きさが違っていても、イヌがほかの動物と異なる点をつかんで、それをイヌと認識することが出来るようになるのです。

絵本はふつう絵と文字で描かれています。イヌの絵を見る経験をくりかえしているうちにそこにかかれているイヌという文字を理解することができるようになり、絵が文字におきかえられても同じ反応を起すことになるのです。そこで、絵による認識が文字による理解に至る、ひとつのステップとして重要な意味を持つことになるのです。幼児が文字という抽象的

な伝達方法を手に入れる段階で、絵本はこのような重要なはたらきをすることになるのです。

他の二つの面については次月号にまわしますが、「幼児と絵本」をお読み下さり、有効適切にお子さんに絵本を与えていただけるようになればうれしいことです。

（48・2・2）

幼児と絵本 2

―― その果す効果について ――

絵本がはたす役割の二つめは、「子どもの想像力を刺激して理解力や想像力を拡大させてくれる」ことです。

子どもたちは、生活経験が少なく知識もとぼしい幼児の世界にあるものについては、物語を聞かせても容易に想像力をはたらかせ、イメージを形ずくることが出来ます。しかし、

幼児の世界にないものについては、想像力をはたらかせるには他の力を借りる必要があります。その場合、絵本の絵は幼児にとって格好の手助けになるのです。

例えば、日本の昔話にしても、昔の社会の仕組みや人々のくらしを知っていなければ、語られる物語を充分に理解することが出来ず、従っておもしろくありません。「桃太郎」にしても、きびだんごや鬼が島、桃太郎の服装など今の子どもの生活や知識にはあまりありません。いろり、うすも同じです。このようなとき絵本を開けば、そこに物語りの世界が展開し、子どもたちがイメージ化出来なかったものが、わかるように描かれています。子どもたちは、それを見て物語りを容易にイメージ化し楽しみ、さらに別の物語りを開いたときは、その絵のイメージをもとに、自分自身の想像力を存分にはたらかせることができるようになります。

絵本の絵を頼りにして、物語りを映像化したことが、単に物語りを読むときの助けになるだけでなく、そこで積み重ねられたイメージが記憶となって、子どもたちの映像作りに役立つわけです。

さらに、想像力は具体的な事物のみに、はたらくだけでなく、感情という抽象的なものの

理解についても同様の作用をすることになるのです。例えば、子どもたちにとって、誇り高いとか、満足したとか、気落ちしたなどという感情の表現は、言葉では理解しにくいものです。ところが絵本の絵によって、その感情があらわされておれば、子どもたちは直観的に、その感情を感じることが出来ます。そして、想像力を心の内面にもはたらかせて、気持を細やかに豊かにする、すべを身につけることができるのです。

さらに、想像力は現実に存在しないものにまではたらくことになります。アンデルセンの人魚姫は現実には存在していません。人間が乗って空を飛ぶじゅうたん、小指ほどしかない人間がモグラと一諸に暮らしているなんて考えられません。しかし絵本はそれらを子どもたちのところに生き生きと描き出してみせ、空想する力をさずけてくれるのです。ファンタジックな絵本をくりかえし見ることによって、子どもたちの空想力は広がり、この世にないものをイメージ化する力を持つことになります。これはやがて、新しいものを生み出す思考力や創造力にも、つながって来るのです。このように、すばらしい絵本の絵は子どもたちの知識や経験の乏しさを補い、想像力に確かな後ろだてを与えることになります。

（48・2・10）

幼児と絵本 3

―その果す効果について―

絵本がはたす第三の役割は、「美しさに対して目をひらくとともに、しっかりものを見る目を養う」、ということです。

子どもたちが絵本を見ているときや、絵本を選んでいるとき、じっと観察していると、写真のように動かない画一的な絵よりも、ひとつの雰囲気をもった絵本を興味深く眺めている姿に接します。軽妙なリズムをもって進む物語りには、それに即した絵が、北国の冷たい冬の夜を舞台にした絵本には、青灰色を主にした絵がつけられています。これらのすぐれた画家の手になる絵本は、それ自体の美しさで見る者の心に喜こびを与えるだけでなく、今まで見えなかった美しいものを見つけ出す力を、子どもに与えてくれるものです。

さらに、すぐれた絵本は、美しさに目覚めさせてくれるだけでなく、子どもの注意を強く引くことにより、注意深くものを見る力を育てる役割もします。

ときに絵本を読み聞かせている場合、おとなである読み手が、なにげなく見ている絵の中から、子どもたちは読み手の気づかないものを発見して知らせてくれることがあります。魔法使いが出て来るとネコがいるとか、この電車は絵本の右側にすすんでいるとか、子どもの興味深い目には、絵本の中から何ものをも見落そうとしないかのように、注意をはらっていることがわかります。例えば、絵の中に誤りがあったり、文と絵とが一致しなかったりすると、すぐに指摘します。また文章のアリの数と絵の数が合わないとか、海の色がなぜ赤くなっているとか、絵本の絵をながめるときの子どもの目は、どんなに細かいところも見落しません。そして、このような作業のくりかえしが、子どもたちにしっかりとものを見定める目を育ててくれることになるのです。

こうして、すぐれた絵本は、美しさに対して、子どもたちの目を開き、子どもたちのものを見る目を養う役割を果してくれるのです。このことがあるために、絵本は、文字へのステップや知識の伝達手段にとどまらず、それ自体が価値ある芸術的な経験として大きな意味をもつことになるのであります。

完全なる教育を子どもに残す

（48・2・15）

卒園児の保護者の皆様には最後の通信になりました。ふりかえってみますと、三年又は二年の間のお子様の園生活、長かったようですがとても早くすぎてしまったようにおもわれます。

それにしても、私なりに幼児の教育にかかわって考えることは、人間の教育とは生涯的なことがらであるということです。別な言いかたをすれば、人間は一生いろいろな者や物、そしてさまざまのことがらとの出会い、かかわりに於て学びつつ成長しつずけるのだ、ということです。

ですから、わたしたちはすぐに、結果を期待するようなことはしてはいけないし、子ども

の一時的な現象や、ある側面だけを見て、その子どもの、よし悪しを決めつけてはいけないと思います。

大切なことは、その時、その場で、その子どもなりに一生懸命に、自分をぶっつけ生活したかどうか、ということです。その意味で子どもたちが、「白百合ホームでの幼稚園生活はとっても楽しかった!!おもしろかった!!」と、しんそこから想って卒園して行ってくれるならば、それでよいのだ、と思っています。

幼児期は、人間一生にとって土台のような時期だと、よく言われますが、その土台という意味は、幼児が将来もつであろう知識や技術修得のための基礎的な知識・技術を身につける準備の時期としての土台というよりも、人間として生活して行くうえで出合う物やことから、又他人とのかかわりに於て、やさしい心をもって積極的に、一生懸命へこたれずにかかわれることが出来る精神の土台・意志の土台・醜の土台ということを指しているのではないかと思います。

このような土台を、幼児期にしっかりと植えつけられ、さらにそれを育てられ、深く自分

のものとして持つにいたるならば、必ず、その子どもは己れが人生で、自分にふさわしい花を咲かせ、果を得るようになるにちがいありません。

咲かせる花、むすぶ果は人それぞれに異なります。しかし、それらが、一生懸命生活したことによって成った果であるならば、他の何にも優って価値あるものだと言えます。

〃完全なる教育を子どもに残すことは、最善の遺産である〃と言った人がいますが、完全なる教育とは、多くの知識や技術を身につけさせることではなく、知識や技術をしっかりと身につけ、それらを用いて、よりよいものを造り生み出して行くたくましい意志と精神又は醜を個人の中に植えつけ、育てることを意味しているのであります。

従って、目先のカッコよさ、表面的な知識の暗記にしかすぎない教育は、結局、何の役にもたたぬことを知っておきたいと思います。

最後に、私たち教師のいたらなさの故に、保育の上で不足した面につきましては、みなさまがたの、おゆるしを願います。

皆様のうえに健康と神の平安とがありますように。

（48・3・1）

子どもの自(おのず)からの成長を助ける

子どもを育てて行く段階で、親が幼児にしなければならぬことは何ですか!!」と問われたなら、「子どもに何かをしなければならない、という親の故意なる思いをすることです」と、私は答えるにちがいありません。

実際、親が子どもにさまざまな規制を与え要求をもってかかれることほど、子どもにとって迷惑なことはないのです。

とは言っても、「何もせずにほっておけ」などと言っているのではありません。「親の勝手な思いで子どもをしばることは止めよ!」ということを言っているのです。

通常、健康といわれる子どもなら、身も心も、知恵も発達順序に従って成長して行く能力を、その内に自から保持しています。親は先ず、子ども自からがもっている成長への能力を信ずることです。事実、母親は子どもが胎内に二七〇日余り在った時、胎児の自(おのず)からの成長を信じ、胎児が成長しやすい安定した状態づくりに配慮しただけです。このことは乳児の折

にも成長しやすいような環境づくりに配慮し、その成長を助けただけでした。それを必要以上に、手をかけ保護しすぎたり、きびしくしすぎたりすると、乳児が自からもつ成長をゆがめることになって所謂いびつな子どもになってしまいます。

これは幼児の場合でも同じです。親は愛情という尤もな名によって、成長しようとする子どもの自からの芽をつみとったり、又教育という名によって必要以上に、芽をひっぱり、子どもの自からの芽をつみとってしまい、結局、いびつな子どもに育ててしまい、「困った、困った」ということになります。

親が本当に子どもを愛するなら、子どもが自からもっている成長能力を充分に伸ばし、開花せしめるために、何をなすべきであり、何をなすべきでないか、ということをよく考えてみることです。そして、決して親のひとりよがりな要求や規制をおしつけ、与えるようなことはしないことです。

そこで、子どもが自からもっている成長能力を伸ばすために、親が配慮しなければならぬことを五つほど記してみたいと思います。

(1) 心の安定。　幼児が自から持っている能力を充分に伸すためには、幼児の心的な活動が伸び伸びと出来るような、安定した家庭環境、幼児園の環境がなければなりません。幼児の心を委縮(いしゅく)さしたり、極度に緊張せしめる条件が家庭や園に於けるしつけの面にあると、子どもの心は安定を欠いて、幼児は自から持っている能力を充分に伸ばすことが出来ません。

(2) 適当な刺激を与える。能力が充分に伸びるということは、外部からの刺激に正しく反応し、その反応を通して心的な活動が円滑に促進せしめられる、これが成長につながるのです。いろいろなことで子ども同志の人間関係で負けたり、勝ったり。又親や教師との関係で忍耐したり、努力したりすることによって自我の活動が促(うな)され、適度に自我が拡大され、所謂(いわゆる)一人前の人間に成長して行くのです。又いろいろな困難や障害に出会うことは、それを克服しようと問題に対処することがおのずと思考体系に刺激となり、その活動をうながす結果になります。従って、親や教師が、いつでも、何でも子どもが考え、耐え克服し解決する以前に、助けの手をさしのべてしまっては、切角の伸びようとする幼児がもつ能力をつみとってしまうことになるのです。しかし、ここで気をつけねばならぬことは、与える刺激は必ず、

その子どもの能力に耐え得る程度のものでなければなりません。そうでないと、かえって子どもに挫折感を与えることになります。

(3) 興味の重視。その子どもが自己の能力を伸ばす条件の一つは、ものごととの関わりに積極的な興味を持つように指導して行くことです。「好きこそ、ものの上手なれ」と言われますが、命令し強制するのでなく、興味を起こさせるようなアプローチが常に工夫されなければなりません。

(4) 遊びを通して。興味をおこす刺激を与え、自我と思考活動をうながす場又は方法は、幼児にとっては遊びを通してです。幼児にとって学習とは、机に向ってペンを持って黙って字を書いたり、計算をしたりすることではなく、友人と遊び、色々なものを用いて遊ぶことなのです。更に、遊びとは、楽しくものごとにかかわるということですから、すべて楽しくかかわれるように工夫してやる必要があります。

以上のように幼児の活動が、積極的になされ得るよう環境の設定を、知恵深く考えてやってこそ、幼児は自我を最大限に伸ばし、そのもてる自からの能力を正しく成長せしむるので

す。

（48・6・1）

参観日なんか無いほうがいい

右の表題は、過日の京都新聞の「窓」欄にのっていた投書の記事の一つです。小学生たちが「参観」について出した結論だそうです。

このような結論を出した子どもたちの理由は、参観日のクラスで、先生の問いに答えられなかったりした場合、その子は帰宅してから、かならず「あんなやさしいこと、わからなかったの!!」と、母親にあれこれと叱られるので、「参観日なんか無いほうがいい」というのです。

白百合ホームでも、去る二日から保育参観がはじまりましたが、子どもたちが先の小学生